心清き者は福（さいわい）なり

ー明治学院と井深梶之助ー

学校法人　明治学院

清心者福矣　以其将見神也

――心清キ者ハ福（サイワイ）ナリ、其ノ将（マサ）ニ神ヲ見ントスルヲ以（モッ）テ也――

馬太（マタイ）伝福音書　第五章八節

井深梶之助記念碑（瑞聖寺内 明治学院墓所）

井深梶之助日記

昭和七年十月二十四日　「太田嘉受子ノ為メ又山本良次ノ為メ色紙ニ清心者福矣以其将見神也ノ聖句ヲ揮毫シテ寄贈ス」

昭和十年一月三日　「午前亀乃サンノ為メニ半折一枚ニ清心者福矣以其将見神也ノ聖句一節ヲ揮毫シテ与フ」

昭和十年三月十五日　「午後春子来ル、千恵子ノ為メ清心者福矣、以其将見神也ノ一句ヲ揮毫シテ与ヘ」

昭和十一年八月二十七日　「三松俊平氏篤志伝道ヲ助ル為メニ清心者福矣以其将見神也ト虚（ママ）者福矣以天国乃其国也ノ二節ヲ揮毫ス」

＊井深梶之助の愛唱聖句を、白金台・瑞聖（ずいしょうじ）寺の記念碑の冒頭に記した。

表紙　「井深梶之助」肖像画
長尾 己画伯制作（明治学院記念館二階設置）

本誌中、所蔵先を明記していない掲載写真については、すべて明治学院歴史資料館所蔵。

激動の時代に生きた井深梶之助先生

明治学院学院長　小暮 修也

明治学院に入職した四五年ほど前、正門を入ると左手にギリシャ風の美しい円柱の建物があった。柱の前の階段でしばしば同僚と話し合ったことが思い出される。この建物は「井深ホール」と呼ばれた。

井深ホール（1925～1979）
当初、高等学部新校舎、戦後は高校校舎として使用。

ところで、白金台・瑞聖寺に古い明治学院宣教師の墓所がある。お寺に宣教師の墓があるということ自体不思議なことだが、当時のご住職のはからいで許可されたとのことである。米国のE・Q・ライシャワー駐日大使（一九六一～六六在任）もよく訪ねて来られたという。

この度、その宣教師墓所の一角に明治学院第二代総理であった井深梶之助先生（以下、井深先生と略）とご伴侶の名を刻んだ記念碑を建てることになった。そこで井深先生のことを、いくつかの観点からとりあげてみたい。

井深先生は、第一に会津の人である。戊辰（ぼしん）戦争時の鶴ヶ城籠城（ろうじょう）戦では藩主の小姓（こしょう）として付き従った。年が二つ上ならば白虎隊一員として自刃していたかもしれない。会津戦争の悲哀を見届けた人であった。

第二に、信仰の人であった。S・R・ブラウン宣教師の指導で聖書を読み、キリスト教書で啓発を受け、信仰告白をして受洗を願い出た。この時はまだ「切支丹禁制の高札」が掲げられていて、逮捕される危険もあった。けれどもそれを覚悟して洗礼に授かった。

また、一八九九（明治三二）年、官公私立の学校に対して宗教上の教育や儀式を禁じた文部省訓令十二号が発令された際には、キリスト教学校を守るために多くの学校代表者や宣教師と共に取り組んだ。

第三に、人格と個性を尊重した人であった。井深先生は学生を呼ぶ場合にも、「A君」と呼ばず、いつも「Aさん」と呼んだ。昔の塾などにみられる子弟型や鍛錬型ではなく、相手の青年を一人の人格と認め、どこまでもその人格と個性を尊重するゆき方である。従ってむやみに相手の人格に立ち入って叱ったりせずにその人の自主性を尊重した。これがヘボン博士から受け継いで井深先生が育んだ明治学院の「自由な校風」となった（桑田秀延「井深梶之助」『日本キリスト教教育史 人物篇』所収、一九二～一九三頁）。

第四に、努力の人であった。ブラウン宣教師から発音を徹底的に鍛えられ、外国人の通訳、国際会議での英語の演説等に力を発揮した。明治学院を退いた後には、若い時に途中となっていた書道を学び直し、「湧泉」という雅号で多くの揮毫（きごう）を表した。

このように井深先生が祈り大切にされたものを私たちも受け継いでゆきたい。

井深梶之助の生涯（敬称略）

生い立ち

井深梶之助は、井深宅右衛門重義と会津藩家老西郷頼母近思の二女（戸籍上は四女）八代子の間に長男として生まれた。一八五四年七月四日（嘉永七年六月一〇日）、慣例に従い会津若松城（鶴ヶ城）下にある母方の実家で出生した。父は五五〇石の上級武士で学校奉行の職にあった。祖父が名付け親となって幼名を清佶と命名した。

一八六三（文久三）年、井深梶之助（以下、井深と略）は一〇歳になり会津藩校日新館に入学した。日新館は武士の子弟が一〇歳に達すれば必ず入学すべき文芸武術の学校であった。

会津戦争

一八六八（慶応四）年一月、会津藩・桑名藩を中核とする幕府軍と薩摩藩・長州藩の軍が鳥羽・伏見で衝突し戊辰戦争が始まった。京都守護職であった会津藩主松平容保は新政府に恭順を示したが、新政府は会津討ち入りを決定した。そこで東北・越後の諸藩は奥羽越列藩同盟を結び、新政府に対抗しようとした。

この頃、越後方面の防衛強化をはかるため父宅右衛門が出陣。父は出陣に先立ち、清佶を改め、梶之助と命名した。増援隊が派遣された際に井深も随行したが、小出嶋の戦いで会津軍は敗れ退却、井深は父の厳命で会津に帰された。

同年五月、会津藩は挙藩抗戦の態勢をとり藩士を年齢別に編成した。井深は数え年一五歳であったため白虎隊に加わることができなかった。

八月に入り、新政府軍が会津城下を急襲したため、武家は生け捕りになることを恐れ自刃するものが相次いだ。鶴ヶ城落城と判断し飯盛山で白虎隊が自刃したのもこの時と言われる。

籠城戦

籠城は八月二三日から九月二二日までの三〇日間続き、井深は小姓として藩主に付き従った（本冊子一四頁「井深家関係資料」参照）。しかし、新政府軍の砲撃、城外との交通が遮断され食糧や弾薬が尽き、戦意は低下し、ついに降伏開城となった。

新政府軍の軍監中村半次郎らの前に藩主父子が麻裃、無帯刀にて家老を伴って出て、全藩士に代わり自らは甘んじて死に就くことを条件に降伏開城を申し出たとのことであった。

城明け渡しの後、藩主松平容保、喜徳父子は滝沢村妙国寺に幽閉、井深らは猪苗代の民家に謹慎させられた。その後、井深は母の元に帰された。

鶴ヶ城

東京・横浜遊学

一八七〇（明治三）年四月、井深は故郷会津を発って五日の旅程の後、新橋斗南藩（旧会津藩）に到着した。

その後、斗南藩開設の徳水院洋学塾、土佐藩英学塾で学び、横浜修文館学僕、修文館改め啓行堂会計主任に任じられた。

一八七二年、中村敬宇『擬泰西人建白書』を読み、西洋文明の基礎がキリスト教にあることを知った井深は、横浜の海岸通りにある石造りの小会堂（海岸教会）にJ・H・バラによる聖書の講義を聞きに行った。また、修文館の教科書『ウィルソン・リーダー』の中にキリストが子どもを祝福している挿絵の意味をS・R・ブラウンに尋ねた。

これが縁となってブラウンの指導で聖書を創世記から読み始めた。

『ウィルソン・リーダー』
（正式には、"The first reader of the school and family series/by Marcius Willson"）
挿絵
明治学院大学図書館 所蔵

ブラウンより受洗

さらに『天道溯原』、『真理易知』を読んで啓発を受け、これこそ真の道であると信ずるに至り、井深はブラウンに信仰告白をして洗礼を受けることを相談した。ブラウンは大いに喜び、海岸教会長老小川義綏に願い出ることを勧めた。その際のことを井深は以下の「回顧録」で記している。

井深がキリスト教の洗礼を授かったのは一八七三（明治六）年一月であり、この年の二月にようやく「切支丹禁制の高札」が撤去された。

1864（元治元）年頃の横浜外国人居留地
後年、井深が受洗したヘボン邸が見える。
横浜開港資料館 所蔵

回顧録

井深梶之助

…横浜海岸通りの小会堂の裏手にある番人小屋同様な狭苦しい日本家に小川氏を訪れ、而して受洗志願の旨を申し出た。そうすると、小川氏は暫時私の面を凝視して居たが、徐ろに口を開いて云うに、我が国では公然耶蘇教信者と成ると云う事には随分危険がある。次第に依ってはそれが為に、召捕られて首を斬らるる様な事が無いとも限らぬが、それでも洗礼を受けたいかどうかと極めて峻厳な質問であったが、自分は之に対して言下に、固よりその覚悟はありますと答えた。すると、それ以上は何も尋ねずに、それならば受洗して宜しいと即座に承認を与えたので、自分はその後間もなく、居留地三十九番地ヘボン博士の経営せられた診療所附属の礼拝室に於て、恩師ブラオン先生から洗礼を領して、横浜海岸教会々員と成った。時は明治六年一月第一日曜日午前と記憶する。（『井深梶之助とその時代』第一巻所収、明治学院、七三～七四頁）

ブラウン塾の開設

S・R・ブラウンは神奈川県庁との三年の雇傭契約が満期となり修文館を退職した。学生たちの失望は大きく、旧桑名藩主松平定教らは、なおブラウンについて英学を修業したいと井深に頼み、井深の尽力によりブラウンの条件も満たされたので、一八七三（明治六）年秋、横浜山手二一一番ブラウン邸でブラウン塾が開始された。井深は塾の学僕兼従僕取締役としてブラウンを手伝った。

1877
（明治10）年夏

東京一致神学校で学ぶ

一八七七年、米国長老教会、米国改革教会、スコットランド一致長老教会が合同し、日本人教職者（牧師）養成のため東京築地に東京一致神学校が設立された。各地の私塾はここに統合されることになり、ブラウン塾生も移動した。

一八七八年頃、東京一致神学校は懸賞論文を募集したので井深は応募し、『耶蘇教問答』を書いて当選した。その後、一八七九年、日本基督一致教会中会で按手礼試験を受け合格し、正教師（牧師）となった。翌年、奥野昌綱の後を受けて、東京麹町教会の牧師に招聘されたが、一八八一年、東京一致神学校助教授に招聘されたため、麹町教会牧師を辞任した。

明治学院創立に尽力

教育機関として内容を充実させるため、一八八六年四月、東京一致神学校、東京一致英和学校ならびに英和予備校の合併創立案が「合同宣教師協議会」で採択され、五月の理事員会（後に理事会と改称）で承認された。六月には「明治学院」という名称が植村正久の提案で決定したが、その意味は「明けき政治の時代の學問の學校、即ち明けき政治の學校」と言われている（＊1）。

九月に井深は神学部教授に選ばれ、理事員会議長にも選出された。井深は理事員会を代表して、荏原郡白金村字玉縄（現港区白金台）の土地所有者と交渉に当たった。当時は居留地外では外国人の土地所有を認めなかったため、理事員会議長でもあった井深梶之助名義で所有した。

一八八九年一〇月、明治学院初代総理にJ・C・ヘボン、副総理に井深が選出された。翌年、井深は米国留学のため一八カ月間の休暇を得て副総理を辞任した。念願のユニオン神学校に入学し、教会歴史を専攻した。

明治学院第二代総理就任

井深が米国留学中に、ヘボンは病気と老弱のために明治学院総理を井深に譲りたい旨の手紙を送った。

一八九一年一一月六日、明治学院サンダム館において井深の第二代総理就任式が行われた。ヘボンはこの就任式の壇上で鍵を井深に渡し、「井深氏はその名の示す通り、梶であります。私は明治学院という船にこの新しい舵をつけました。この船はこれからどのような方向に乗り出しましても、この舵は決して針路を誤りません」と挨拶した（＊2）。

欧化主義から国家主義へ

一八七三年の「切支丹禁制の高札」撤去以降、欧化主義の中で、キリスト教と教会は発展し、キリスト教学校は各地に設立された。

しかし、一八八九（明治二二）年、大日本帝国憲法が発布され、翌年、教育勅語が発布されると国家主義が急速に台頭した。一八九一年に内村鑑三不敬事件が起こるとキリスト教界に対する批判が激しくなり、自由な雰囲気とキリスト教精神を基調とする明治学院も学生数が減少した。

文部省訓令十二号問題

一八九九（明治三二）年七月を期して改正条約が施行されることになった。この結果、外国人居留地は廃止され、外国人に居住・旅行の自由、営業の自由が認められることとなった。いわゆる「内地雑居」により、政府や一部の指導者らは外国人宣教師の活動が活発化し、日本が思想的に欧米に従属させられることを憂慮した。

こうしたことからキリスト教学校による影響をおそれた文部省や教育界の一部指導者は、キリスト教学校に対して制限を加えることを準備した。しかし、私立学校令として、学校管理者からの外国人締め出し、宗教行事禁止の条項を、条約改正時に制定することは国際的に大きな問題となることが懸念された。

そのため、一八九九年八月三日、排他性が緩和された私立学校令の公布と共に一段低い文部省訓令十二号の発令によって所期の目的を達成しようとした。その内容は次のとおりである。

一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件

一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最モ必要トス依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ

明治三十二年八月三日

文部大臣　樺山資紀

この文部省訓令十二号によって官公私立の別なく学校において宗教教育や宗教行事を行うことができなくなった。

従って全国のキリスト教学校はその存立の精神を危うくすることになった。

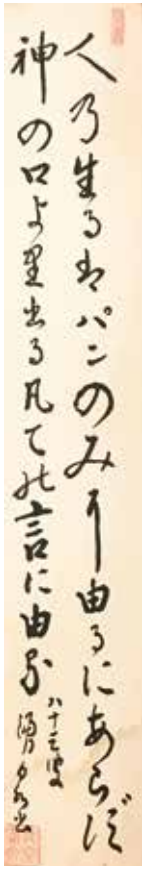
八月二六日、青山学院、麻布英和学校（東洋英和学校）、同志社、立教中学校、明治学院および名古屋英和学校から代表者が集まり、「六基督教学校内外代表者会議」が開かれた。ここでは訓令十二号の憲法違反を指摘し、キリスト教教育の堅持を記した開書を作成して各キリスト教学校代表者ならびに役員に送付した。

翌八月二七日、夏期休暇中であったが、明治学院緊急理事員会が開かれ、尋常中学部は特権を即時返納、普通学部の名称で聖書教授礼拝を執行、同種の学校のため友校と協力して文部省当局の反省を促し特権の回収に努むることを決議した。

井深はキリスト教学校代表者と共に政府高官・文部省幹部と交渉し、訓令の撤回や中学校と同等レベルの学校の特権確保を訴えた。また、宣教師のW・インブリー（明治学院教授）やD・C・グリーン（同志社教授）と共に政府指導者と交渉した。

インブリーとグリーンは大隈重信（前首相）、伊藤博文（元首相）、山縣有朋（現職首相）と面談し、外国人の立場から信教の自由問題が外交上の国際問題になっていることを認識させた。

一九〇〇年には同志社普通学校、明治学院普通学部が徴兵猶予を獲得、一九〇一年には高等学校進学の権利を回復、一九〇三年には専門学校入学者無試験検定校に指定、一九〇四年には高等学校無試験入学検定校、中学校令による中学と同等の資格を得た。こうした措置は全国のキリスト教学校にも適用され、訓令十二号は実質的意義を失うこととなった。


井深梶之助筆聖句　明治学院大学図書館　所蔵

基督教教育同盟会の結成

一九〇九年、日本のプロテスタント開教五十年記念会が開かれ、井深は「基督教教育の前途」と題する講演を行った。そこでは文部省訓令十二号問題に一致して取り組み活路を開いたこと、また、「単に中等教育のみならず大学教育までも基督教の感化の中に受けしめ、然（しか）して基督教的の品性を養成せしめんことを希望せざるを得ず」「最高の教育機関を設けて基督教的人物を養成するの必要あるなり」とキリスト教大学の設立を訴えている（＊3）。

文部省訓令十二号に対するキリスト教学校の抵抗運動は基督教教育同盟会（現キリスト教学校教育同盟）として結実された。即ち、開教五十年記念会において基督教教育同盟会規約草案が提示され、翌一九一〇（明治四三）年四月六日、教育同盟会総会が同志社神学館において開催された。

創立総会には、青山学院、大阪三一神学校、関西学院、神戸神学校、東京学院、東山学院、同志社、福岡神学校、明治学院、桃山中学校の一〇校の代表者が集まり、会長には井深梶之助、副会長には原田助が選出された。

国際会議への参加

一九〇五（明治三八）年、井深はフランスのパリで開かれた万国基督教青年会同盟大会（創立五十年記念大会）で日本基督教青年会を代表して演説した。その後、欧州各地を巡り各地の青年会及び教会で演説を行い、交流を果たした。帰路、米国に渡り、明治学院の基本金募集につとめ、ノックス、ヘボン、アメルマンなど明治学院のために尽くした宣教師を訪ねた。

さらに、一九一〇年、イギリスのエディンバラで開かれた世界宣教会議にはキリスト教諸教派から一二〇〇名以上の代表が集い、宣教の多彩な諸問題を集中して協議し合った。その第三分科会「国民生活のキリスト教化と関連する教育」では、井深が日本におけるキリスト教大学設立の必要性を演説した。

男子においては、各キリスト教学校に高等学部が存在していたため、これらを統合してキリスト教大学を設立する努力がなされたが、資金面や教派間の考えの相違があり実現に至らなかった。

女子においては、エディンバラ世界宣教会議を受け、海外宣教団体の支援が結集し、日本基督教女子教育会が結成された。

日曜学校第八回世界大会
1920年、司会・井深（右から二人目）、講演・渋沢栄一（立位者）

「井深日記」における
スペイン風邪の記事

大正七（一九一八）年十月二十八日
授業如例　生徒中ニ感冒ニカカルモノ多シ、其数百以上ナリ、
大正七年十月三十日
授業如例　教員生徒中病人多シ、中学部八午前中ニテ休業ス、

こうして一九一八年、連合基督教女子大学として東京女子大学が開設された（初代学長は新渡戸稲造、学監に安井てつ、常務理事はA・K・ライシャワー明治学院教授が就任）。

井深は一九二二（大正一〇）年に総理を辞任してからも、その後、約二〇年間、名誉総理として明治学院および日本のキリスト教界を常に見守り続けた。

1932（昭和7）年6月、書斎にて

＊1　佐波亘編『植村正久と其の時代』第三巻、教文館、一九三八年、四七四頁。
＊2　『明治学院九十年史』明治学院、一九六七年、九七～九八頁。
＊3　『井深梶之助とその時代』第三巻所収、二四七～二四八頁。

井深梶之助の思い出

井深梶之助は、一九四〇（昭和一五）年六月二四日、天に召された。その年に発行された『明治学院時報』等において各界からの思い出を語る文章が掲載された。

井深先生の思ひ出

島崎　藤村（詩人・作家）
一八九二（明治二十四）年　普通学部卒

故井深先生の英語に精通せられたことは、斎藤勇君の所感にもある通りで、今更小生の申上げるまでもありません。

学院時代当時の普通学部四学年の頃、井深先生は「英文学選集」二巻の訳の授業時間を受持たれました。アンソロジイ風に編まれた原書であったと覚えます。先生が日頃の造詣の深さを思ひ知りました。得るところが多かったのもあの時でした。井深先生が語学の上の練達は、石本三十郎先生の軽妙な通訳術と共に、当時にあっての双璧とも言ひたく、これは学院内にのみかぎらないことでした。

［『明治学院時報』第九十八号　昭和十五年九月二十日発行より］

先生の英語と細心

斎藤　勇（英文学者、東京帝国大学教授）

明治四十年万国キリスト教青年会大会が東京で開かれた時、井深先生は度々壇上から英語で報告をなされた。一学生であった私は、そのやうに英語を話すことは他の日本人には不可能だらうと思った。私が学生でなくなってから間もなく青年会同盟委員の末席を汚すやうになっては、井深先生の議長ぶり、殊に外国人には英語を以て応答なさる鮮やかさに、驚歎するほかなかった。私などは英語で話すことを努力しない方がよいと、横着なことを考へるやうになったほどである。

先生をおたづねしたことが唯一度ある。それは御勇退後、大正十五年の春であった。私は聖書和訳史を調べてゐたので、そのお話を伺ひに出たのである。御懇篤に教へて頂いた。数日の後には御丁重にも参考文献を二つ知らせて下すった。（その御葉書は今私の机上にある。）さういう細心な御注意にも御人格がしのばれる。

［『明治学院時報』第九十七号　昭和十五年七月二十日発行より］

故井深梶之助先生を想ふ

山室　民子（日本救世軍）

故井深梶之助先生を想ひ、哀惜の念に堪えません。実は私自身は先生を個人的には深く存［じ］上げませんでした。先生の夫人花子先生は私の旧師で、女子学院在学当時、化学を御教へ頂きました。先生は学課の間に折々御家庭の生活に就て語られることがありましたが、さういふお話を通し、私は花子先生を尊敬するのみならず、梶之助先生にも敬慕の念を抱くやうになりました。梶之助先生は教界に偉大な足跡を遺されしのみならず家庭人としても立派な方であられたらしく、女として私は特に其点を深く感銘致してをりました。亡き父山室軍平は梶之助先生を甚く尊敬もし、御慕ひもしてゐて軽井沢などでお目に掛る際には如何にも親しげにお話致してをりました。先生の御病篤しと聞いた時には、病身をも顧みず自ら御見舞に上って夫人に御面会し、お祈りして帰ったこともございます。其後も先生の御健康には常に関心をもち、度々お噂し聖旨ならば、御快復なさいますやう、少しでもお楽になられますやう願ってゐました。井深御夫妻は救世軍の為にも色々御尽し下され、其事も父は何時も感謝致してをりました。

［『明治学院時報』第九十七号　昭和十五年七月二十日発行より］

わが知れる総理

平林　武雄（明治学院大学教授）
一九二八（昭和三）年　中学部卒
昭和六年高等商業部卒

私は大正十二年に中学部に入学した。それゆえ総理室における井深総理を知るはずもない。何かの式の時に壇上にあおぎ見る井深名誉総理の役割は、まず祝禱ときまっていた。その短い祈りの声は清く澄んで荘重、講堂のすみずみまで徹り、これならば確実に神様のところまでとどくぞと思ったほどである。私の級友石山茂太君は今でもクラス会などで少々まわってくると、必ず白髪頭を振立ててやおら祝禱をはじめるのは全く恐縮だが、あれは総理の祝福が身にしみた結果なのだろう。

私はその後寄宿舎の舎監をやり、敷地つづきの井深邸にも出入りするようになった。舎監をやめ、結婚し、長女が生まれた時、小さい彼女を抱いて参上したことがある。先生は幼児の手をとってあやして下さり、大そうご機嫌がよかったが、お疲れになってはと、気を利かしたつもりで一時間ほどで辞去した。数日して花子夫人から、

「あなたがお帰りになったあと、女中と私とが、主人にきびしくしかられました。おもてなしが悪いからお客さまが早く帰ってしまったのだ、と申して、本当に散々でした。」

といわれた。亡くなる一二年前の先生は幼児の友達になって下さるほどお優しくなられた。

［『明治学院同窓会報』第十九号　昭和四十二年十月発行「わが知れる総理たち」より］

以上、『明治学院歴史資料館資料集【第一集】―井深梶之助生誕一五〇年記念号―』（二〇〇四年十一月二十日）より転載。

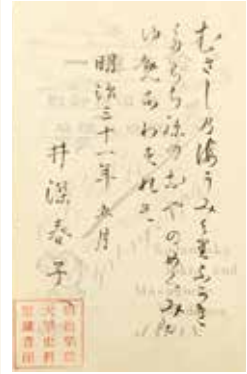
井深梶之助、妻を思ひて和歌を詠む

歴史資料館特任研究員　松本 智子

ここに一枚の女性の写真（＊1）がある。

彼女は井深梶之助の先妻、勢喜子。写真の裏には井深の筆跡で次のような和歌が記されている。

むさしの海うみよりふかき
たらちねのおやのめぐみは
ゆめなわすれそ
明治三十一年五月
井深春子へ



一八九八（明治三一）年三月二二日、井深は勢喜子を病で亡くした。二ヶ月ほど経った五月、当時、数え年一〇歳だった三女春子へ勢喜子の写真を与えたのである。

この写真と同じものが井深アルバム（＊2）に収められており、メモ書きに「明治二十五年、前明治学院総理ヘボン博士帰国ニ際シテ撮影」とあることから、勢喜子三三歳頃の写真と分かる。

写真の裏に添えられた和歌は「武蔵の海、その海よりも深い母親の慈しみは決して忘れるなよ」と、我が子と亡き妻への愛情に満ちた内容であった。

当時の井深日記（＊3）には「嗚呼、若シ勢喜子ノ在タランニハ」（一八九八年三月三〇日）、「無キ人ノコトヲ思出ツ」（同年四月二日）などと記されており、折に触れて勢喜子を偲ぶ井深の姿が垣間見られる。

また、次のような場面もある。一八九八年八月二〇日、井深は古い書翰類を虫干しする。勢喜子の書翰が含まれていたのであろうか。ふいに彼の胸に種々の思いが込み上げ、自らの心のうちを代弁するかのような古歌二首を日記に書き付けている。

藤原基政
あらざらん後しのべどもいはざりし
言の葉のみぞ形見なりけり（＊4）

加藤千蔭
語らひし昨日はうつゝ今日は夢
思ひさだめぬよにもあるかな（＊5）

ちなみに、これら二首の詞書は、もとの歌集によると、それぞれ「人のなきあとにふるき文を見いだしてよめる」、「哀傷」となっている。

このほか、日記には、自ら勢喜子への思いを詠んだ和歌も散見される。ここに五首を紹介したい（＊6）。

転宅後、亡き妻のことを思出でて
よきにつけあしきにつけて思ふかな
亡き妻にだにあらましかばと
（一八九八年六月二〇日）

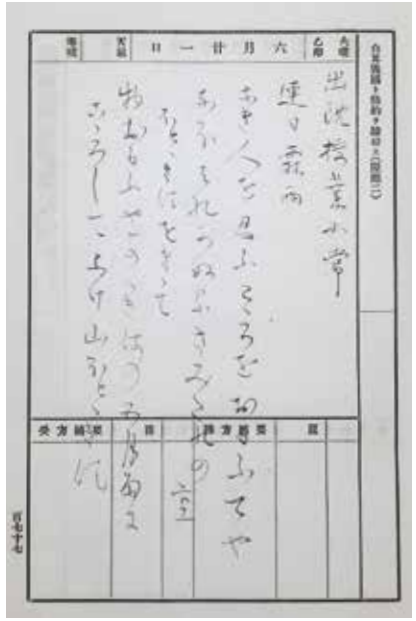
一八九八年六月九日、井深一家は芝区車町から芝区白金今里町へ転居する。引っ越しの慌ただしさに気が紛れていたものの、片付けが一段落し一息ついた時、傍らに居るはずの妻がどこにも居ない現実に引き戻された梶之助。先立たれた悲しみと喪失感を率直に詠じた。「良い時も悪い時も思うことだ。亡き妻さえ居てくれたらと」。

六月下旬、雨が降り続く。井深にとっては涙雨である。

連日霖雨
なき人を忍ぶ心をおもふてや
なほ晴れかぬる五月雨の空
ほとゝぎすをきゝて
物思ふ宿の軒端の五月雨に
心してなけ山ほとゝぎす
（同年六月二一日）

身まかりぬる妻を思出でて
末つひにあひおふものと知りながら
などか別れのかくもかなしき
（同年六月二二日）

さのみやはいかで嘆かん限りなき
命の望みなき人のごと
（同年六月二三日）



「井深日記」1898年6月21日

当時、明治学院第二代総理としての業務や日々の授業に追われる立場にあった井深にとって、和歌を詠むひとときが、天に召された勢喜子と向き合えるかけがえのない時間だったのかもしれない。

妻を思いつつ詠んだこれらの和歌は、総理の顔とは異なる家庭人としての井深梶之助を私たちに伝えてくれている。

＊1・2・3　明治学院歴史資料館 所蔵。
＊4　『続後撰和歌集』所収。
＊5　『類題草野集』所収。
＊6　引用した和歌については、読みやすさを考慮し、原本の表記を一部改めた。

井深家関係資料（伊藤三千子氏寄贈）より

二〇一〇年度、井深梶之助の御子孫にあたる伊藤三千子氏より明治学院へ井深家関係資料一七六点を御寄贈いただいた。ここでは、梶之助にゆかりの深い品々から一部を紹介したい。なお、寄贈資料は、明治学院歴史資料館で保管し、活用させていただく。

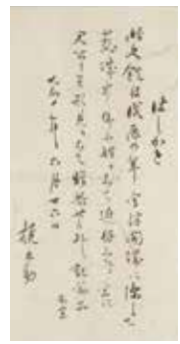
母八代子の刀剣

一九三五（昭和一〇）年一〇月付井深梶之助自筆の由緒書によると、この刀剣は母八代子が西郷家から井深家に嫁ぐ際に護身刀として携帯し、会津籠城中も常に身に付けていたものという。母の他界後に花に譲られた。

他にも井深は少なからず刀剣を所持しており、井深日記からは、それらの刀剣を時折点検して、錆（さび）を生じた刀剣があれば研師を呼んで手入れをさせたり、自らも油を塗ったりして大切にしている様子がうかがえる。

松平容保公より贈られた文鎮

一九二二（大正一〇）年六月二六日付井深自筆のはしがき（写真左）によると、この文鎮は一八六八（明治元）年の会津鶴ヶ城開城の時、籠城中小姓として近侍した井深に対し、君公（松平容保）より形見として贈与された記念品であるという。



井深梶之助の落款

（湧泉）

（井深湧泉）

（井深梶印）

（壷中菴）

井深梶之助筆聖句

井深は明治学院を退職後、本格的に書道を学び始める。その経緯については、一九二九（昭和四）年の井深日記の巻末部分に井深自身が次のような内容を書き記している。

少年の頃より習字に興味を持っていたが、一五才の時戊辰戦争となり、九死に一生を得るも、その後は学資もなく、書法を学ぶ余暇もなく過した。しかし、晩年の一九二三年二月に大病を患い、自らも含め誰もが再起を疑ったが、幸いにして快復した。静養するにあたり、ある人から習字を始めてはどうかと勧められた。そこで友人の秋葉省像に書道を学ぶことにしたという。

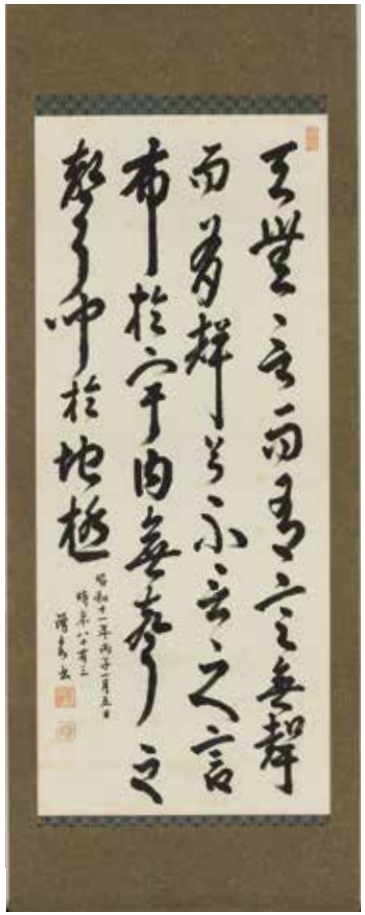
日記によると、一九二四年五月二日、井深は週一回の書道教授を秋葉に頼み快諾された。その後は時間があれば足繁く秋葉のもとに通い書道にいそしんでいる。

一九二五年九月二日、雅号につき秋葉の意見を求めたところ、ヨハネ伝第四章一四節に拠り「湧泉」または「涌泉」がよいだろうと薦められた。井深は「湧泉」を雅号に定める。また秋葉からは、人の依頼に応じて揮毫するよう、上手になって揮毫しようというのは間違いであると言われた。

マタイによる福音書
第22章39～40節

一九二六年三月二九日、井深は初めて人のために揮毫し落款した作品を知人たちに贈った。当日の日記には、「漸ク文字ラシキ書ガ出来ルヤウニ成」ったことと、秋葉の指導への感謝を記している。

以降、井深は聖句を中心として軸・色紙・短冊などに多くの揮毫を残した。



記念碑に刻まれた「清心者福矣…」と同様に、井深が折に触れ揮毫して人に贈った詩篇19篇３～４節の聖句。

天無言而有言無声
而多声兮不言之言
布於宇内無声之
声聞於地極
昭和十一年丙子一月五日
時年八十有三
湧泉書

井深梶之助　関連略年表

一八五四年七月四日（嘉永七年六月一〇日）　会津若松城下の母方西郷家で生まれた。幼名 清信（さよのぶ）。

一八六三（文久三）年　会津藩校日新館に入学。この年、J・C・ヘボン夫妻がヘボン塾（英学塾）を開始（明治学院の始まり）。

一八六八（慶応四）年　一五歳で元服し、梶之助と改名。会津戊辰戦争で越後に出陣。会津若松で一六、一七歳で編成された白虎隊に一歳不足し入れず。藩主の小姓となる。若松城で籠城戦に参加。 P.4

一八七〇（明治三）年　東京に出て、斗南（旧会津）藩洋学塾入学、その後、土佐藩英学塾に入学。

一八七一（明治四）年　横浜修文館の学僕に採用され、S・R・ブラウンらに英語を学ぶ。 P.5

一八七二（明治五）年　横浜のJ・H・バラ宣教師の話を聞く。ヘボン施療所の小会堂でブラウンから聖書を学び、受洗を申し出る。 P.5

一八七三（明治六）年　一月、ヘボン施療所の礼拝堂でブラウンから洗礼を受け、横浜海岸教会の会員となる。ブラウン塾が開設され、生徒となる。二月、切支丹禁制の高札撤去。 P.5

一八七七（明治一〇）年　東京築地に東京一致神学校開校。一期生として入学。 P.6

一八八〇（明治一三）年　東京麹町教会牧師就任。水上勢喜子（セキ、関子）と結婚。 P.6

一八八一（明治一四）年　東京一致神学校助教授就任。

一八八六（明治一九）年　東京一致神学校、東京一致英和学校、同予備校が合併し明治学院となる。同学院神学部教授就任、理事員会議長に選出される。 P.6

一八八七（明治二〇）年　明治学院、白金に開校。 P.6

一八八九（明治二二）年　ヘボン、明治学院初代総理就任。井深、副総理となる。 P.7

一八九〇（明治二三）年　渡米し、ユニオン神学校に留学。 P.7

一八九一（明治二四）年　内村鑑三不敬事件。ヘボン辞任を受け、明治学院第二代総理となる。 P.7

一八九八（明治三一）年　勢喜子逝去。

一八九九（明治三二）年　学校での宗教教育・儀式を禁ずる文部省訓令十二号発令。尋常中学部の資格を返上し、キリスト教教育堅持を貫く。 P.7

一九〇〇（明治三三）年　大島花（花子）と再婚。

一九〇一（明治三四）年　明治学院普通学部、上級学校進学資格を回復。 P.8

一九〇五（明治三八）年　キリスト教関係国際諸会議に出席のため欧米歴訪。 P.9

一九一〇（明治四三）年　基督教教育同盟会（現キリスト教学校教育同盟）が設立され、初代会長に就任。 P.8

一九二一（大正一〇）年　明治学院総理を辞し、名誉総理となる。 P.9

一九四〇（昭和一五）年　六月二四日逝去。六月二六日、明治学院葬が行われる。

心清き者は福（さいわい）なり
－明治学院と井深梶之助－

2021年10月発行

参考資料（文中以外）
『井深梶之助宛書簡集』（明治学院）
『明治学院百年史』『明治学院百五十年史』
『キリスト教学校教育同盟百年史』

協力　瑞聖寺、石政石材店

学校法人　明治学院
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
法人事務局　学院長室　TEL 03-5421-5230　FAX 03-5421-5236
URL:http://www.meijigakuin.jp/

無断転載を禁じます。